

大学生と高校生が本気で語り合う

札幌市 NPO 法人いきたす

“40 にして惑わず” とはいうものの、人はいくつになっても迷い悩む。まして、これから大人になろうとする思春期の高校生には進路、友情、恋愛、親との確執、勉強と部活との板挟みなど、小さな胸が押し潰されそうな難問が次から次へと去来する。中には誰にも相談できずに登校拒否になったり、自死への道をたどる若者も後を絶たない。

こんな高校生の中に飛び込んで、本気で語り合い、次に進むべき道の動機付けを提供する大学生の出前授業が、道央を中心に静かに広がっている。

NPO法人「いきたす」のカタリバ北海道だ。自らも同じように悩み、苦しみ、それを乗り越えた、ちょっと年上の大学生が、真摯に語りかける姿に動かされ、自分の進む道をすっきりと決断する高校生も多く、授業を受け入れる高校は全道的に広がる気配を見せている。また授業を担当する大学生も、「自分の人生勉強になる」、「後輩のお役に立てて生きがいを感じる」など純粋無償のボランティアながら参加者は増える傾向にあり、若者のコミュニケーション不足や自立心の欠如といった社会的問題の解消にも一石を投じている。

■2010年（平成22年）北海道に導入

「カタリ場」は東京の女子大生2人が2000年（平成12年）に、首都圏の高校生を対象に始めた大学生による対話授業

システム。多くの高校生が人生や進路に悩みながら、誰にも相談できずに大きくなることに気づき、ちょっと年上の先輩と本音で語り合うことで解決のヒントを得てもらおうとの狙い。効果があることが知られるにつれ全国に広がり、北海道には2010年（同22年）、当時札幌で、大学教育の支援活動をしていた特定非営利活動法人CANの一事業部門として導入された。それから2年半、道内33高校で授業が行われ高評価を得た。その結果、受講申し込みが相次ぎ、一事業部門では消化しきれなくなったため、事業部から切り離して独立することに決定。

教育の専門家で、「CAN」に「カタリ場」を導入する事にも関わった江口彰さん（40）が、新組織を引き受ける事になり2014年（同26年）、名前を特定非営利活動法人「いきたす」とし、江口さんが初代表理事となってスタートした。ちなみに「いきたす」とはアイヌ語の「イキ、アス」から作った造語で「行動して成長する」という意味。江口さんは理論と実践を実現するという生き方を貫いており、自分自身を実験台にするチャレンジ精神も込めた。また「カタリバ」は活動や組織を「カタリ場」は授業そのものを指し区別している。

「いきたす」への「カタリ場」の申し込みは、それまでの実績がものをいって極めて順調で、2015年度は20高校を超す見通し。毎年開催を希望する高校も多く、

「CAN」時代から通算すると実数で30数校、80回、受講高校生は1万人を突破した。

授業を直接担当するのは札幌を中心とした大学生や専門学校生。高校の規模や受講生数にもよるが、1校につき40~50人でいずれも無償のボランティア。一度参加した学生が友達を誘ったり、先輩が後輩を招いたり、大学側の推薦など参加理由はまちまちだが、全員、自分たちが辿ってきた人生を振り返り「悩む高校生の役に立ちたい」、「高校生と語り合うことで自分も成長したい」など、人生と真摯に向き合う面々ばかり。

学校は北大、道教育大、藤女子大、勤医協札幌専門学校などのほか、本州の東大、早大、金沢美工大など数十校に及び、この多様な背景を持つ学生が集まることで、難しい今日社会を生き抜く知恵が生まれ、後進ときちんと語り合える実力がつくと考えられている。



フロアに広がり、車座に座って語り合う学生と生徒たち

■ 座学と体験発表で心を開く

「カタリ場」は、黒板を前にした教室ではなく、屋内体育館で行われるのが原則。学生一人に高校生5~6人が車座になって話し合う座談と、大学生の体験発表を聴

き再び座談に入るという流れで概ね2時間の内容。

ひときわビートのきいたBGMが体育館に流れる中、高校生が学生の手拍子に迎えられて入場。整列して学生側の簡単な挨拶の後、直ちに学生一人と生徒5~6人で班を作り、館内に広がり床に車座に座って座談を開始。この場では、気が散らないようにとの配慮から第三者の参加も発言も一切禁止。

語り合いは自己紹介から始まり、趣味や部活、好きな学科、友人や好きな人の有無など軽い日常会話を交わしながら進められ、緊張が解かれてゆく。ここで生徒たちに、心の中を打ち明けられる雰囲気を作り出せるかが、リードする学生の腕の見せどころ。

座談は20分。リラックスしたところで、体験談を話す男女3人ずつの学生が紹介され、生徒たちはそれを聴いてみたい語り手の所へ移動し、扇形に取り囲んで発表がスタート。語り手の学生は、この授業のために数週間かけて用意してきた自分の生い立ちから、高校時代、大学生になった今日までの悩み、迷い、それをどうやって克服したか、その時の喜びなどを、自作の紙芝居風の絵文字を片手に包み隠さず話してゆく。この段階で、座談の時はつまらなそうにしていた生徒たちは俄然、興味を示し始め、目を輝かせ、身を乗り出し、一言一句聞き逃すまいと耳をそばだてる。語る学生にも力が入り、身振り手振りを交えて自分の熱き思いを語ってゆく。

大学2年生のA君(19)は、子どもの頃交通事故に遭って身障者になり、ずっと劣等感を抱きながら生きてきた。それが、

高校時代に会った恩師から「そんなにくじけるな」と激励を受けたことで自信を持ち、今、大学生になって幸せだ。こうしてみんなのお役に立てるとても嬉しい——と、どんな苦境にもめげず、前向きに生きる事の大切さを話した。

その他の語り手も、自分だけしか体験していない挫折や苦悩、そんな中からの立ち直りの人生を切々と語りかけ「みんな悩んで成長してゆく。大いに悩んでください」——などと激励した。

体験発表は15分。その後、再び5~6人の車座になり、今聴いたことを念頭に座談を再開。ここでは先輩の赤裸々な体験を聴いた後だけに、生徒たちも真剣となり、進学についての親との意見の違いや、部活と勉強の両立の難しさなど、迷いや苦しみについて次々と相談を持ちかけ、適切なアドバイスを受けた。

会場にはこの間も、ムードづくりのためのBGMがずっと流れていたが、話し合いが熱を帯びるにつれ音量は次第に小さくなり、曲も落ち着いたものになるなど、ものを考えるのにふさわしい雰囲気になった。また座談会や体験発表に加わらなかった学生たちは、残り時間を示す紙をもって会場を回ったり、アンケートや感想を記入する用紙を各自に配ったりと、語り合いが少しでもいい結実をもたらすようにと細かい気配りを見せた。

授業はこの後、もう一度別の語り手の体験談を聴いて車座に戻り、最後のまとめとして高校生が将来への思いや、そのために今日からできることを「約束」という形で紙に書き残して終了。高校生たちは入ってきたときの緊張の面持ちはどこへやら、大

半が明るく晴れ晴れとした表情で教室へ。事後のアンケート調査でも「普段話せないことが話せてよかった」、「先輩の熱意が心まで届き、よしやるぞと意欲がわいた」など、解きほぐされてやる気を出した若い思いが寄せられた。

「カタリ場」の授業はこの後、晩秋にかけて後志・倶知安農校、札幌・稲雲高でも行われ、生徒だけではなく傍聴した現職教師からも「若いエネルギーをもらった。負けてはいられない」など高評価を得た。



学生の体験談を、一言一句聞き逃すまいと、真剣なまなざしで聴き入る男女高校生

■ 特徴は綿密な準備と予後フォロー

カタリ場の特徴は、何と言っても事前準備と事後フォローの濃密さだ。授業の3ヶ月前には、担当する学生の代表が3~4人でチームを作り、当該校に出向き、進路指導の教師と面談。その学校の環境や課題を掌握。同時に受講生全員から将来展望や抱えている悩みなどのアンケートを集める。これらを持ち帰り、参加学生全員で分析し、どんな狙いや方向で授業に臨むかを決定し学校側に通知する。並行して仲間が数人ずつ下宿やアパートに集まって何日もかかって授業内容を検討し、体験発表は誰がどんなテーマで行うかなどを決め、それぞれが万端の準備を整えて本番を迎える。

とはいえ、これだけ準備して授業に臨んでも満足いく出来はそう多くなく、授業の後に全員で行う反省ミーティングでは「もっと適確なアドバイスができたのではないか」、「今ひとつ生徒の心を揺さぶる語りができなかった」など反省や、更なる向上を目指す弁がぼんぼん。

また授業の最後に生徒たちに書いてもらった「誓い」は、「カタリバ」に持ち帰って整理した後、ホームページ上の「カタリ場北海道カフェ」に掲示され、この中でこのやりとりで学生と生徒の繋がりはのちのちまで続く。

こうした一連の流れは、無報酬で昼食さえ当たらない学生にとってかなりの負担と思われるが、当の学生たちは「色々な人達と出会え、学び、経験を積むことで人間的に成長でき、自分たちの将来にも大きく役立つと信じています」と屈託がない。



授業を終え、今日のできばえ反省を語り合う大学生たち

■ 財政は苦しいが全道展開が夢

こうした活動を展開する現メンバーは直接的には5人。ほかに会員が7人、授業の場数を踏み、企画から進行までを担当するベテラン大学生が数人といったところ。運営費は、学校に負担してもらおう生徒一人あたり2千円の受講料と有志の寄付、

道地域活動振興協会などからの助成金が主。とはいえ受講料は学校の経営難から一人500円から千円に値切られることもしばしばで、2014年度の収支はわずか700万円程度。学生の、札幌から学校までの移動こそチャーターバスを使うものの日当はおろか昼食さえ出せないピーピーの状態だ。この現状に江口代表は「いまは『カタリ場』の浸透を先行させているので、我慢してやってもらっているんです」と苦笑い。

今後については「少子化とはいいいながら道内には1学年に4万人、3学年合わせて12万人の高校生がいます。ですから授業を受けたのはその中のほんの一部で、潜在ニーズはまだまだあると思います。今は、人手や予算の関係で、札幌から日帰り出来る範囲内ではしか展開できていませんが、いずれ各地に出先のなものを作り、多くの高校生に“生きる力”を醸成してもらいたいと考えています。授業を担当してくれる大学生には、自らも成長するというもの本当に感謝しており、早く昼食代ぐらいは払えるようにしたいです」と大きい夢を語っている。

■ 連絡先

〒060-0808

札幌市北区北9条西4丁目7-4

エルムビル1F

NPO法人いきたす

代表理事 江口 彰（えぐち あきら）

TEL：070-6603-1095

（メールのやりとり希望）

Email：akira.eguchi@me.com

団体 mail：info@ikitas.net